Ignis

イグニス ＝ 炎

2023 年度　夏号
発行者 六甲学院宗教部
発行日 2023 年 7 月 23 日（日）

3 月の春休みに行った、カト研の巡礼・黙想会に参加した生徒の感想文・振り返りを掲載します。
81 期（当時高２）と 84 期（当時中２）は、広島の戦跡巡り、大和ミュージアム見学、82 期（当時高１）と 83 期（当時中３）は、広島平和記念聖堂見学をそれぞれ行い、合同企画として、イエズス会の清水神父様（元六甲学院校長）の講話受講、平和記念公園内施設見学、そして姉妹校の広島学院訪問を行いました。

その目に今、映る世界は

81 期　高榮　欣二

傷跡を残す証人たちが、声もなくその悲惨さを語りかける、そこはそんな場所だった。

彼らは今の世界をどう見ているのだろう。

確かに平和であると言えるかもしれない。しかし実態は？どこかで銃声が鳴り響き、誰かが恐怖の中で生きている。原爆の脅威は、あろうことか政治に利用され、今や世界中の大国が核を戦力として保有する。日本さえその威を借りている。これが彼らの望んだ平和か。彼らの望んだ未来か。そんな訳がない。

広島学院の聖堂にある聖像は、平和を求める祈りが書かれた壁を向き、その背は爆心地を向いているという。彼は暗い過去を、人の犯した罪の遺跡を背負われ、人々の祈りに目を向けられている。僕たちも倣おう。過去を背負いながら、未来を向き、世界を変えるよう努めよう。決してこの一つの空を、悲しみに覆わせない様に。

青空を裂き、飛行機が白い残像を残してゆく。きっとあの日も、「景色は」同じ。彼らの目に、映る世界は。

「日常」

81 期　石井　泰地

行きの新幹線で、少し緊張しながら、後ろに座ったユダヤ人の方々に言った、「きゃないりくらいんまいしーと?」という拙い英語から、今回の旅は始まった。

今回の巡礼は、西川先生の企画のもと、日中、日露戦争などでの、加害者としての広島、第二次世界大戦での、被害者としての広島、そして日本の造船の拠点として成長を続ける、現代の広島、この主に三つの広島を軸に観光した。僕は広島に行くのは初めてで、やはり原爆を落とされた「負の遺産」としてのイメージが強く、広島をどこか被害者のように見ていたところがあった。しかし、いざ広島にいくと、広島は当たり前の日常を取り戻し、人々も僕らと何ら変わらない日々を送っていた。原爆投下地点には、今は病院が建てられ、唯一小さい説明板が、原爆がここの空中で炸裂したことを教えてくれた。原爆資料館で見た中で印象的だったのは、1 人の少年の、真っ黒に焦げたお弁当の展示だった。お弁当は、僕らにとって一番身近な「日常」を象徴するものであり、その真っ黒なお弁当は、辛うじて米飯が判別できる程度だったが、原爆が落ちる直前の瞬間まで、当時の人々は命を宿し、各々の日常を持っていた。そして、その日常が突如、一瞬のうちに奪われたことを物語っていた。

しかし、僕は何十万人の日常を徹底的に破壊した行為に対して、怒ることができなかった。もちろん、亡くなった方々の命を軽んじている訳ではない。ただ、人間とは一体、何なのだろうかと、疑問を抱かずにはいられなかったのだ。怒りとか、悲しみではなく、ただ不思議だった。ところで、原爆資料館に行く前に、公園で、千田貞暁(明治時代の広島県知事。彼の先見の明によって、日清戦争時には臨時の首都となるほど広島は発展し、今の広島の基盤が作られた。広島郷土資料館で聞かせてもらった広島の成り立ちについてのお話は非常に面白かった)の銅像が、眼前に広がる広島の街を見守っている傍らで、本当に無邪気に木登りをする子供たちがいて、その光景は今も鮮明に覚えている。そこには驚くぐらい当たり前の日常があり、その日常はとても美しく輝いていて、時の流れを強烈に意識させられたと同時に、その日常はいつ突然奪われるかも分からない、非常に脆いものであり、そしてそれゆえに、今も昔も変わらないその尊さに気づかされた。そして、考えているうちに、原子爆弾の投下すら、数ある人間の営みの一つにすぎないんじゃないのか、そう思ったのだ。

今回の旅行は死などの悲劇にまつわる場所を観光する「ダークツーリズム」としての要素を持っていたが、僕らは人間の歴史の中でも一際色濃く刻まれた「悲劇」に触れ、人間の本質について思いを巡らした。こんなにも多くの命を奪い、悲劇を引き起こすことのできる人間は、善なのか、悪なのか。人間は他の「命」と一体何が違うのか。人間は、本当に神の似姿なのか。人間の営み、動物の営み、植物の営み、コロナウイルスの営み、価値の優劣はつけられるのだろうか。

最後に、僕は今回の巡礼で、生命の営みの神秘性、美しさを改めて実感し、それにただ感動した。原爆が落ちる直前の広島の人々、木登りをする子ども達、原爆を落とした兵士、快く席を倒させてくれたユダヤ人の方、そして、この文章を書いている今の自分。どんな命だろうが、どんな行いをしようが、全ての命が持つ輝きを思い、胸を打たれた。今の僕にはまだ、全ての問いに結論を出すことはできないし、明日も僕が生きているのかどうかさえも分からないが、広島の経験で得たこの感性を、残りの人生でも大切にして、これから出会うであろう命の輝きを見つめて行きたい。

広島巡礼

81 期　河合　悠真

清水神父様のお話を聞いて

「あなたはどんな人になりたいか。」この問いは僕にとって、意外にもなかなか新鮮なものだった。僕は長らく将来の夢を探していたが、最近やりたい事を見つけどんな道を歩もうか考えることが多くなっていた。その事に少し満足していた自分だったが、清水先生の話の軸はまたそことは違う所にあったからだ。清水先生の問いは職業などを指しているのではなく、人間としてどうありたいか、というもっと本質的なものだった。将来の夢は叶うか分からないので、こういう人でありたいという変わらない信念を聞いていたのだろう。未来のことは考えるようになっていたのにそれは意識してなかった…と意表を突かれた気分だった。そこで改めて、想定外のことが起きたり希望しない未来になったとき自分はどうありたいか、というアングルで将来の形を考えてみた。それは僕に自分の心の奥底にある性格の本性を浮き彫りにして自認させるものだったように思う。頭の中で言語化してみると、自分の性格(それも本性のような)を客観視しているようで面白かった。この問いの他の人の答えを聞かせてもらうと僕とはかなり違っていて、それもなかなか面白かった。このお話を聞いて、普段気づかないようなことに気付けたし、「どんな人になりたいか」という答えを自分なりに見つけることができた。(清水先生が紹介してくださった人のように)僕は将来の夢以前にその信念を貫き通せる人になりたいと思った。

広島の食べ物の話

広島といえばやはりお好み焼き(広島焼きというと怒られるそう)。町ではお好み焼き屋がとても多かったが、もともと広島に住んでいらっしゃった西川先生のおすすめのお店「みっちゃん」で食べた。地元の人のおすすめはやはり美味しかったが、いつか他のお店にもいって食べ比べてみたいと思った。広島に来て一番初めに食べたのは「むさし」のおむすび弁当だった。広島で有名で、塩加減が絶妙によく今まで食べたおむすびの中で一番美味しかったように思う。また、汁なし坦々麺も食べた。香辛料がとても沢山入っていて舌が痺れるほどだったが、辛いもの好きな自分にとってはたまらなかった。広島の食を満喫する事ができてとても良かったし、また来た時にも是非食べたいと思った。

平和資料館や広島散策を通して

広島散策では広島の当時の状況を学んだ。僕は広島がアジアでも有数の巨大な軍事拠点だったことをあまり知らず、ただ原爆が落とされた町としてしか当時の広島を認識していなかった。そこで、物事を多角的に見ることが大切だと思い知らされた。歴史的な話になると特に、自分の気付かないうちに一方的な角度からでしか物事を捉えることが多くなっているのではないかと思った。何事も一つの角度からだけだと見えない側面がありバイアスがかかってしまうので、多方面からも見て考えることが重要だと感じた。

平和資料館では「形として残すこと」がとても大切だと感じた。展示されているものは教科書に載っているような被曝の写真だけでは無く、一人の少年の日記やある家族が被曝によって崩壊した経緯など私的な記録までもが具体的に展示されており、それがとてつもないリアリティを僕に感じさせた。ひしひしと原爆の恐ろしさが伝わってきたが、同時にこの最悪の出来事が形として残せる時代で良かったとも思った(物騒かもしれないが)。また、平和資料館には外国から来た人がとても多かったのが印象的だった。日本は現在核爆弾が使われた唯一の国なので、やはり世界的にとても大きな意味を持つのだろうと思った。あの資料館が核の愚かさを世界全体に向けて象徴し、二度と同じ歴史を繰り返さないように平和に貢献し続けて欲しいと思う。

その日の夜に皆で分かち合いをした。平和学習を通して何を感じたかを時間をとってまとめ、それを皆で共有した。同じものを見てきたはずだが人それぞれ捉え方は違い、他の人の話を聞くのは面白いと思った。普段時間をとって振り返りを、それも複数人で行うことはなかったので新鮮な機会だった。今後にも生かしていきたいと思った。

巡礼で学んだリアルな原爆

81 期　長田　励

広島巡礼では 1 日目に「加害者としての日本」として、日清、日露戦争で栄えた軍都廣島の姿を、2 日目には「被害者としての日本」として、原爆を投下された都市、広島を知り、3 日目に呉で帝国海軍の歴史を学んだ。また、元六甲学院校長の清水神父のお話を聞いたり、広島学院との交流をしたり、様々に充実した巡礼を体験することができた。

1 日目は広島郷土資料館を訪ね、広島の発展して来た様子、帝国陸軍の要所となったいわゆる「軍都廣島」を学んだ。現在の広島は戦国期のものよりも三倍近くの大きさがあり、江戸時代から明治大正にかけて大規模な干拓、埋め立てが行われた。この干拓と埋め立ての違いというのが重要で、実は広島は沿岸部から少し内に入ったところで海抜がマイナスであるところが多い。これは江戸時代には海水を抜くだけの干拓が行われたのに対して、近代には海底を底上げする埋め立てが行われたことが理由らしい。また、干拓された地域の大きな通りで周りよりも少し高い所にあるもの(御幸通り)が干拓の時の工事道路だったりなど、現在との繋がりを身に染みて実感でき、歴史を学ぶことの面白さに改めて気がついた。1 日目に学んだのは主に帝国陸軍の歴史であったが、3 日目には呉、いわば帝国海軍の心臓部で学んだ。呉の大和ミュージアムでは 10 分の 1 スケールの戦艦大和の模型や様々な艦艇の模型、設計図、そして軍港としての呉の歴史が仔細に展示されていて、世界にも覇を唱えた聯合艦隊の一端を知ることができた。

中でも私が最も強烈な印象を受けたのが 2 日目に行った原爆資料館である。小学校の時に行ったことのある人も多いと思うが、リニューアルして全く異なる、インパクトの強い資料館に生まれ変わっている。私が身のすくむような思いがして印象に残ったのは、被爆者のリアルな写真や遺品の展示である。実際に現物があることでイメージが湧き、生々しく私たちに訴えかけてくるものがあった。生き残ったモノ(人も服も日記も建物も)があることがとても大事だと分かった。例えば廣島産業奨励館は取壊す意見にも関わらず保存され、原爆ドームとして世界中に原爆の恐ろしさを伝え、八月五日で途切れた子供の日記は平和の尊さを静かに語りかける。もしこれらを残していなかったら、悲劇を再び引き起こす可能性は確実に高まり、逆に残してくれたお陰で鮮やかに被害の実態が浮かび、私たちも次に必ず繋げるべきだと感じた。

今回の巡礼は先に書いたように、非常に充実したもので楽しかったし、受験勉強とは一味も二味も違う、もっと根本的な意味での勉強ができたと思う。コロナの影響で中 1 以来の泊まりがけの巡礼だったが、最後にこのように意義の深いものが出来て良かった。

広島巡礼の感想

84 期　森　大征

今回の巡礼旅行は初めてで、巡礼ということでしんみりとした雰囲気かなと思っていましたが、高校 2 年の先輩や広島学院の生徒との交流もあり、楽しい 3 日間となりました。また、この旅行を通じて自分や他人について考えさせられました。

1 日目に清水神父から「自分はどう生きたい」という問いに対し、僕は人のために生きたいと思っていました。そして、1 日目の戦跡と 2 日目の平和記念公園で日本は唯一被爆した国で、被害者であると共に他国に残虐な行為をした加害者でもあります。これは昔のことですが、今の第三次世界大戦が起こると言われている世界の状況を見ていると、平和に生きている日本の人々は、また同じことを繰り返し、他者を傷つけたり傷つけられたりしてしまうことが起こってしまうのでは？親切な広島の人たちも戦争により無理矢理残虐な行為をさせられるのでは？と心配になりました。そして、僕は平和な世界を目指すことが自分が満足す

る人のためになる生き方だと気づきました。ですが、それは自分の身を捨てる覚悟なしにはできないことです。僕はその覚悟があるのかと聞かれても必ず「はい」と答えられる自信がないほど、まだ未熟なままです。しかし、巡礼旅行を通して成長することができました。このようなさまざまなことを考える機会を与えてくれた良い巡礼旅行に行くことができ本当に良かったなと思います。

広島巡礼黙想

84 期　大原　遼真

今回の巡礼旅行は初めてで巡礼ということで、じんまりとした雰囲気かなと思っていましたが、高校 2 年の先輩や広島学院の生徒との交流もあり楽しい 3 日間となりました。また、この旅行を通じて自分や他人について考えさせられました。1 日目に清水神父から「自分はどう生きたい」という問いに、僕は人のために生きたいと思っていました。そして、1 日目の戦跡と 2 日目の平和記念公園で日本は唯一被爆した国で被害者であると共に他国に残虐な行為をした加害者でもあります。これは昔のことですが、今の第三次世界大戦が起こると言われている世界の状況を見ていると、平和に生きている日本の人々はまた同じことを繰り返し、他者を傷つけたり傷つけられたりしてしまうことが起こってしまうのでは？親切な広島の人たちも戦争により無理矢理残虐な行為をさせられるのでは？と心配になり、僕は平和な世界を目指すことが自分が満足する人のためになる生き方だと気づきました。ですが、それは自分の身を捨てる覚悟なしにはできないことです。僕はその覚悟があるのかと聞かれても必ず「はい」と答えられる自信がないほど、未熟なままですが巡礼旅行を通して成長できることができました。このようなさまざまなことを考える機会を与えてくれた良い巡礼旅行に行くことができ、本当に良かったなと思います。

広島巡礼・黙想旅行

84 期 大橋 愛俊

僕は、この旅行で多くの「初めて」に出会いました。 まず、「広島」と言いますか、岡山より西に行くのは初めてでした。他にも、被爆建物や戦争の遺跡に見学に行くことも初めてでしたし、平和とはそれますが、「銭湯」や「たんたん麺」、「広島学院」、そして、僕が初めて自分から行きたいと言ったお泊まりでもあり、「初めて」ばかりでした。

初日は加害者側の日本ということで、宇品港という、昔陸軍が出征する兵士を送り出していた港に行きました。きれいな海で、デッキでみんなとお昼ご飯を食べ、子供達が遊び、とても平和で、昔ここで多くの涙が流れたとは思えませんでした。日清戦争後、天皇が通られた通りには御幸通りという名がつき、記念碑が立ち、凱旋行進を行なっていたそうですが、僕のイメージは華やかよりも、悲しみでした。その後、郷土資料館や千田貞暁像、旧広島陸軍被服支廠、平和の塔など、主に広島の発展に尽力した建造物を見学しました。しかし僕が最も驚いたことは、被爆建物がまだ残っているということでした。原爆は全てを破壊したということしか知らなかったので、原爆の惨事を伝える建物があり、見学ができるということに、次の人たちへ原爆を伝える方法があるのではと思いました。

2 日目は、被害者側の日本ということで、原爆ドームや平和資料館に行きました。教科書やテレビで見る原爆ドームとは違い、実際に好きな角度から眺められるので、気になっていた中を見ると、瓦礫が散乱し、想像以上の酷さに驚きました。また、この建物を残そうと努力してくださった方々にとても感謝しました。

最終日は僕が行きたかった呉の大和ミュージアムに行きました。時間がなかったのですが、特に僕はムービーに興味を持ちました。そのムービーとは、大和の最後と最近の残骸の調査のお話でした。船内の緊迫した様

子がありありと伝わってきて、亡くなった方々のお名前が都道府県別に表示された時、その多さに驚き、悲しくなりました。前の展示で、兄弟で大和に乗っていた方の話があり、それを思い出しました。
平和や戦争について学びましたがその他にも素晴らしい体験を幾つかしました。まずは広島学院との交流です。最初はうまくしゃべれるかどうか心配でしたが、同じ部活であることや、相手も積極的に話してくれたことにより、一瞬にして最高の親友となりました。他にも関西と広島の差など、今まで感じることのなかった感覚を覚えました。電車の中や、教会の人、学校の人、銭湯の人などに「人の温かさ」を感じ、心がポカポカしました。
人生初がいっぱいあった旅行は感慨深いもので、さまざまな出来事にあい、様々な出来事を学べる素晴らしいものでした。

広島巡礼黙想

82 期　鈴木　爽太

一日目の広島学院訪問では、高２の学院生がクイズを交えながら、校舎を案内してくれました。校舎の至る所に平和の願いや額縁が飾られており、広島学院が平和に対する強い思いで建てられたということが分かりました。図書室では、司書の方から、入り口にかけられているヨハネ・パウロ二世の平和メッセージの言葉について説明を受け、ここにも平和への思いを感じることが出来ました。また、木工部屋では、スペイン人の修道士の方から木製のコースターをお土産に頂きました。とてもつるつるしていて心が落ち着きました。

二日目の朝、宿泊していたイエズス会長束修道院の朝ミサに参加し、神父様のお話を聞きました。お説教の中で、神父様から「ギリシャ語を習え」と言われて驚きましたが、そのほかのお話しで、世の中を良くしていって欲しいというメッセージも頂きました。ミサの後、平和記念公園や原爆ドームを見学し、原爆の惨状を理解し、絶対に戦争をしてはならないといと感じることが出来ました。午後からは広島焼きを満喫して帰路につきました。

広島巡礼黙想

82 期　本村　明裕

僕は一日目の広島学院に行って、思ったよりずっと六甲学院に似ていることに驚きました。丘の上にある景色の良い校舎でキリスト教の精神に基づいて学ぶという点です。しかし、六甲学院と違う点も二つあって、一つ目は宗教の授業が六甲学院では座学中心なのに対して、広島学院では校外活動が多いという点です。僕は机に座って色々と考えるよりも、実際に体験した方が、身につくことが多いと思っているので、素直にこちらの方が良いと思いました。

二つ目の違いは、部活動についてです。広島学院では運動部と文化部の兼部が認められており、一つの部活は週二回と決まっているにも関わらず、優秀な成績を多く残しているということです。これは、勉学の成績が良いということは、他の事（部活動）にも影響を及ぼしているということであって、一つの事に習熟する者は、他のことにも習熟するという事実を表しているということだと思いました。